

# 地籍図・史料から見た 中世の甚目寺町

● 加藤博紀

文献・伝承・地籍図などを利用して、円覚寺蔵富田荘絵図で東北部にあたる萱津宿を中心に甚目寺町の景観復元を行う。伝承によって、絵図で描かれる寺院をすべて確認することができた。また、甚目寺町周辺は、荘園・用水系統が錯綜する地域である。それは自然地形に規制されたものであり、史料では近世前期までしかさかのぼることはできない。しかし、中世の荘園（富田荘・海東荘）の史料と考古学的知見により、鎌倉・室町の再開発期に自然地形を利用して原型が形成された可能性が指摘できる。

## 1 はじめに

平成16年度の当センター『研究紀要第5号』において、「尾張国富田荘の考古学的研究」と題して、当センター中・近世部会の共同研究が発表された。当稿では、富田荘の十二ヶ里北部にあたる名古屋市中川区・海部郡大治町を、表採資料を利用した考古学的検討や愛知県公文書館に保管されている明治17年作成の「地籍字分全図」（以下「地籍図」とよぶ）を利用した歴史地理学的検討から検討した。

本稿では、さらに北部の海部郡甚目寺町を中心に検討していく。文献学の視点から甚目寺町内における富田荘と近隣荘園および萱津宿などを、歴史地理学の視点から甚目寺町及び東隣の新川町西部（註1）の地籍図を検討したうえで、過去の甚目寺町を中心とした景観復元を行いたい。

## 2 甚目寺町を中心とした景観復元

中・近世部会の共同研究の成果をふまえ、さらに北部に該当する甚目寺町及び新川町西部を地籍図から用いて検討したい。その地図が、地図1である。

甚目寺町及び新川町西部においては、3つの

微高地群を認めることができる。

### 微高地群 1

新居屋から石作、森にかけて地域。この微高地群の中には河川の跡と考えられる旧流路Aがある。

### 微高地群 2

西今宿から甚目寺、本郷、坂牧にかけての地域。この微高地群の中にも河川のあとと考えられる旧流路Bがある。中・近世部会の共同研究では、微高地群Gにつながる。

### 微高地群 3

上萱津から下萱津、及び須ヶ口西堀江、土器野新田にかけての地域。この微高地は、甚目寺町・新川町では五条川の自然堤防となっている。また、後述の微高地群4とつながる。ちょうど五条川と庄内川との合流点になる。中・近世部会の共同研究では、微高地群Aにつながる。

この微高地群3は、庄内川の自然堤防とながっていることが新川町東部の地籍図から確認できる。庄内川と五条川の合流点であるからであろう。

### 微高地群 4

下小田井を中心とした地域。この微高地群は、庄内川の自然堤防となっており、微高地群3とつながる。

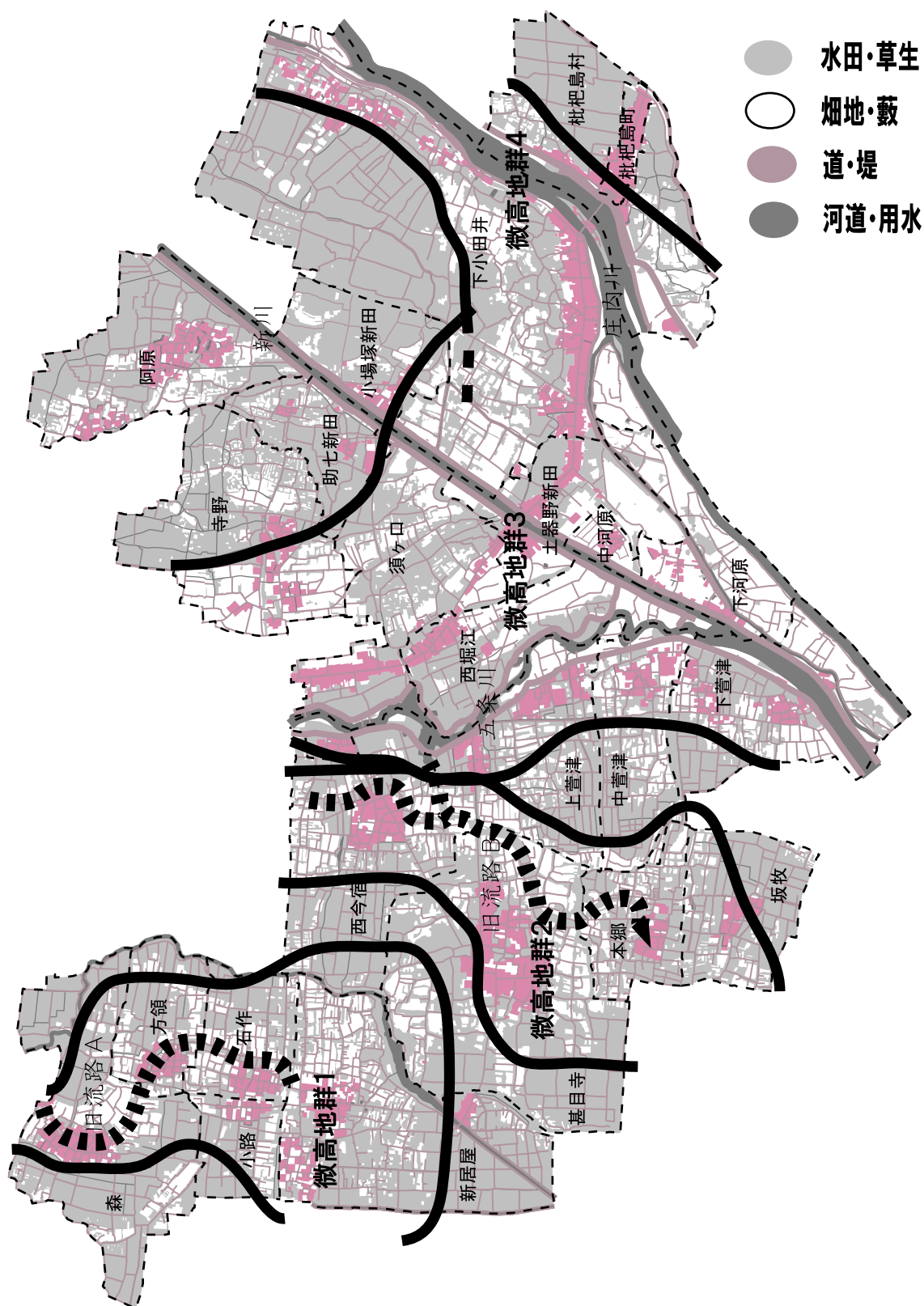


図1 甚目寺町・新川町（現清須市）付近の地籍図（1/1200の原図を接合の上、1/28に縮小）

### 3 文献に残る甚目寺町

#### (1) 中世の甚目寺町内の荘園

円覚寺領富田荘の荘域は、円覚寺蔵の絵図によると、一円所領としては十二ヶ里の北端（現在の地名では、名古屋市市中川区富田町新家北端の線）が北限であった。しかし、富田荘には街道沿いの馬嶋・北馬嶋・二俣、御厨河（庄内川）対岸の賀茂須賀などの飛地や「石丸」と称された散在所領があり、甚目寺町には萱津宿近辺の集落が所在した。北馬嶋が別相伝であり、これらの飛地・散在所領には円覚寺領ではあるが近衛家の領家職が及ばなかった地域があると推定される（註2）。萱津宿に関しても、尾張守護で萱津を守護所とした北条得宗家との関連が想像され、同様なことが想定される。

また、萱津宿内においても、円覚寺の支配権が及ぶ地区と及ばない地区があることが指摘されている。絵図では、萱津宿は現在の五条川にあたると思われる川に沿って4地区があり、上流から「円聖寺」「千手堂」「光明寺」「大御堂」の4寺を中心とする地区があったことがわかる。そのうち、「光明寺」には円覚寺の支配権が及ばなかったと推測されている（註3）。ちなみに、この「光明寺」は現在までも法灯をつなげており、時宗寺院として往時をしのばせている。

また、中世の甚目寺町には他にも荘園は所在した。海東荘と甚目寺荘である。なお、甚目寺荘はその荘名以外に明らかではない。

海東荘は、海東三箇荘ともいわれ上・中・下の三荘に分かれており、上荘の新屋郷、中荘の森大日前・石作社、七寺西・松野里・中之庄などの地名から、甚目寺町周辺から稲沢市南部にかけて荘域があったと比定されており、平頼盛が尾張守の時（12世紀）に成立した一円型荘園である。平野部の一円型荘園は、河川流域の不安定耕地の回復、荒廃公田の再開発の密接に結びついて形成された（註4）と推察されており、海東荘も同様な形成過程が想像される。また、この海東荘は、蓮華王院領とされ、領家職は、平頼盛・光盛父子を経て、上・中荘は15世紀

中葉まで久我家が相伝した。下荘は明らかではない。地頭職は、承久の乱以降、下野の御家人小山氏に充て行われ、建武政権下の久我家による領家・地頭職兼帯を経て、上荘松葉・新屋両郷地頭は平賀忠時が、中荘は京都の真如寺が地頭職を領有している。上荘大山寺郷は、観応の擾乱の勲功として、土岐氏一族と幕府と関連の深い禅寺が伝領した（註5）。ちなみに、この土岐氏は富田荘においても文和4年（1355）以降押領をしており、尾張守護土岐氏による荘園侵略の様子が2つの荘園からうかがえる。

なお、近隣には庄内川右岸上流に「於田江保」（国衙領）・「於田江荘」、さらに右岸上流には著名な「安食荘」（醍醐寺領）がある。五条川上流に「清須御厨」（伊勢神宮領）がある。

#### (2) 文献が語る中世の甚目寺町

萱津宿 中世における萱津宿は、京都と鎌倉を結ぶ鎌倉街道の主要な宿場であった。これは、『經覺私要鈔』の応仁2年（1468）末条の「自京都至鎌倉宿次第」に、京都より20番目の宿として記載されている。また、『東関紀行』の仁治3年（1242）8月半ばに、東関紀行の著者が京より鎌倉に下る途中、を経て熱田に泊まる記載がある。著者は、萱津東宿で「そこらの人萱津あつまりて、里もひゞく計にのゝしりあへり、今日は市の日になんありたるとぞいふなる」とにぎわう市の様子を伝えていることは有名である。ここで萱津の「東」宿とあることが注目される。

一方で、『海東記』の貞応2年（1223）に、海道記の作者が京より鎌倉へ下る途中に津島渡を経て三河国矢作宿へ行く途中に、4月7日に萱津宿に泊まっている。ちなみに、津島渡から萱津宿へ行く途中の農作業にいそしむ光景は、往時の尾張の様子を語るものとして名高い。また、興福寺東院主光暁の日記である『東院毎日雑々記』の応永33年（1426）の条に、9月21日に津嶋天王社に奉物をした後、萱津に至った。ちなみに、途中に甚目寺を参拝したことが記されている。翌22日に熱田社の参詣後に萱津に戻って中島郡一宮へ泊まったことが記載されている。

以上から、中世の主要街道の宿として、地域



図2 萱津宿の円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂の配置図

の定期市の場合として、萱津宿が栄えている様子がわかる。

また、『北野社一切経奥書』に応永19年(1412)銘のある「中阿含経巻第五四」の奥書に「尾陽州新長谷寺 定光院」、同年銘の「大法炬陀羅尼経巻第一八」の奥書に「尾張国愛智郡萱津堀江定光院」とあり、現在の新川町西堀江の長谷院に当たると思われる。

萱津の寺院 『甚目寺町史』に古老の伝承として、萱津の七ツ寺というものがあったという。その七ツ寺とは、円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂・妙勝寺・宝泉寺・正覚院(長福寺)のことであるという。あくまでも伝承ではあるが、富田荘絵図に記載される萱津宿の円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂がすべてあることは興味深い。千手堂は、中萱津の小字大坊がその跡であろうと伝えられており、大正の初年に大坊の土取場から古銭や灰などの出土があったとのことである。また、大御堂の跡は今の実成寺であると伝えられている。これは、妙勝寺開祖日妙が、元応元年(1319)に寺を弟子日長に譲って、大御堂跡に隠居したが、その寺が今の実成寺となっているからであるとしている(註6)。これらを図としたものが図2である。

円覚寺蔵富田荘絵図をみると、南から大御堂・光明寺・千手堂と連なるように描かれる様子と古老の伝承は一致する。また、大御堂から東へ二本の線—おそらく道だと思われる—が二つの河の合流点へ向かって延びているように描かれている。これを地籍図と比較すると、実成寺の位置と新川掘削以前の五条川・庄内川の合流点の関係と符合するように思われる。また、現在においても地籍図上でも、実成寺の前の道から五条川へ出ることができる。

中世の絵図と近代の地籍図を軽々に比較することは避けなければいけないが、古老の伝承をもとに復元すると、長い年月を超えた一致点が浮かび上がってくるようにおられる。

### (3) 甚目寺町・新川町西部の用水

上村喜久子氏は、富田荘絵図研究において、近世前期の用水利用のあり方を中世の村落の結合関係からの反映として考察している(註7)。ならば、甚目寺町においても同様な考察に行てみたい。

寛文12～13年(1672～73)成立の『寛文村々覚書』に記載された甚目寺町・新川町西部(西堀江村・須ヶ口村)内の旧村の用水系統を示したものが図3である。なお、甚目寺町内



図3 甚目寺町付近の用水系統

の用水は、五条川から上萱津から水を引く「萱津井懸り」と木曾川本流の水を葉栗郡宮田杵から引く「宮田井懸り」があった。

甚目寺町においては、用水利用の面から、石作・新居屋などの北西部と甚目寺・萱津などの南東部に分かれていたことがわかる。なお、これは、弘安5年(1282)でも石作郷が中島郡の一部であった記録(註8)があることから、古くからの郡の違いが反映しているとも考えられる。また、「萱津井懸り」の系統は、五条川右岸のみならず左岸にも広がっている。『寛文村々覚書』によると、西堀江村・須ヶ口村も「萱津井懸り」の用水系統に含まれている。また、土器野新田村の田作も「須加口村余り水懸ル」とあることから、同じ「萱津井懸り」といえる。現在須ヶ口と土器野新田には新川が流れているが、新川は天明4年(1784)に着手され天明7年(1787)に完成したものであり、寛文年間には新川は存在しなかった。だから、これは新川開削以前の様子を物語っている。ちなみに、西堀江・須ヶ口に東隣の河原村は「稲葉地村余り水懸ル」とあり、水田は庄内川左岸の区域にあるので左岸から用水を供給されていた。

この「萱津定井」は、明暦元年(1655)に杵が設置されたとされる。しかし改修であった(註9)らしく、既設の水路を利用したことがうかがえる。用水系統から見ると、近世以前から甚目寺・萱津などの南東部と西堀江・須ヶ口などの新川町西部は密接な関係があったことが指摘できよう。

#### (4) 小結

文献から見た中世の甚目寺町は、おおまかに石作・新居屋などの北西部と甚目寺・萱津などの南東部の二つが古くから分かれていた様子を知れる。また一方で、文献や寺院、用水系統から萱津は五条川の対岸にある西堀江・須ヶ口との関連が指摘できる。

これらを地籍図の結果と比較すると、近世初期の用水系統と比較するならば、微高地群1は「宮田井懸り」の村々、微高地群3は「萱津井懸り」の村々と比定できよう。また、中世以前の荘園と比較するならば、微高地群1は一円型荘園である海東荘とのつながりが指摘で

きる。

さらに、富田荘は、前述の通り上村氏によって中世前期に古代の用水系統を利用して整備されたことが明らかにされているが、考古学的知見を援用すれば、五条川水系中・下流域における再開発は、古代末(11世紀末葉～12世紀)期と中世、鎌倉末期(13世紀末葉～14世紀)の2回に大きな動向が見出すことができる(註10)。また、海東荘が立地した森南遺跡において、13世紀中頃に出現した中世村落は古代的・伝統的な条理の規制に拘束されず再開発が行われている(註11)。また、阿弥陀時遺跡においても14世紀から15世紀初頭にかけての方形区画に基づく、「屋敷地」、「道」、墓地的な空間のいくつかがあ明らかにされている(註12)。これらの考古学的知見に対して、12世紀に立荘された海東荘は、中世、鎌倉末期における海東荘での開発の動向は明らかではない。しかし、中世・鎌倉末期に共同体としての村が形成されるとともに、再開発が実施されていたと思われる。そして、この時期で「宮田井懸り」の原型となる用水も掘削されたものと思われる。

## 4 まとめ

甚目寺町は、自然地形・旧郡割などにより、北西部と南東部の二つの歴史を有する。北西部は、海東荘によって中島郡とつながりを持ち、これが近世に入って「宮田定井」の用水系統に含まれることになる。南東部は、中世の萱津が五条川両岸に展開することから、近世においても「萱津定井」の用水系統でつながりを有し続けたと思われる。さらに、中世の荘園までさかのぼると、「宮田定井」の用水系統は海東荘との関連が指摘でき、甚目寺町北西部の自然地形は中世から近代まで大きくは変わらなかったことが想定されよう。想像をたくましくれば、他の近隣荘園との関係も指摘できるかもしれない。

さて、今回の考察は、富田荘絵図北端に描かれた萱津をテーマと取り上げた。富田荘における萱津は散在所領であったことと甚目寺町周辺地域が中世の荘園・近世の用水系統における錯綜する狭間ともいべき地点であったこと

から、散漫な記述になってしまった。また、中世における甚目寺は、『一遍上人絵伝』に描かれているが、文献などで確認するところが少なかったため、本稿において甚目寺町の中心に位

置し長い伝統を有する古代以来の寺院・甚目寺は、考察の中心にできなかった。機会があれば、甚目寺を含めた考察に挑みたい。

## 註

- 1) 旧新川町は、旧清洲町・旧西枇杷島町とともに平成 17 年 7 月 7 日に新清須市として合併した。本稿では、旧清洲町・旧西枇杷島町を扱わないことと煩雑になることを防ぐために、「旧」を添付せず表記する。
- 2) 上村喜久子 1990 「富田荘」(『講座日本荘園史 5』366 頁、吉川弘文館。
- 3) 村岡幹生 「荘園・公領制下の人々の生活」『新修名古屋市史第二巻』205 頁。
- 4) 上村喜久子 「尾張国」『講座日本荘園史 5』、341 頁。
- 5) 上村喜久子 「尾張国」『講座日本荘園史 5』、353 頁。
- 6) 甚目寺町史編纂委員会 1975 『甚目寺町史』523 頁。
- 7) 上村喜久子 1986 「絵図にみる富田荘の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要』第 24 号。
- 8) 「山城浄金剛院領田島坪付注進状」の記載から (『山城醍醐寺文書』)
- 9) 前掲書『甚目寺町史』148 頁。
- 10) 『愛知県埋蔵文化財センター 1987 『土田遺跡』(調査報告書第 2 集) 109 頁。
- 11) 甚目寺町教育委員会 1990 『森南遺跡発掘調査報告書』147 頁。
- 12) 愛知県埋蔵文化財センター 1987 『阿弥陀寺遺跡』(調査報告書第 11 集) 310 頁。